

九州保健福祉大学・社会福祉学部臨床福祉学科における  
「家族の理解及び支援者としての写真活動」講話の感想レポートを抜粋

本日は「家族の理解及び支援者としての写真活動」ということで、お話をさせていただきました。私は、写真家の方を目の前で見るということは初めての経験でした。どんな講演になるのか、楽しみでした。まず、息子さんが統合失調症に罹患されたというお話でした。私はまだ味わったことのない親としての立場を、小林さんの話とともに想像してみました。小林さんがとても詳しくそれからの経緯をお話ししてくださり、このような状態のときはどう思うのか、何が必要なのか、など何とも言えない気持ちになりました。小林さんが息子さんのためにあらゆる地域資源を調べられて、最終的に、ご自身の持っている資源を活用されるのが一番であるという結果に巡りついたのは、素晴らしいことだと感じました。

写真家としてのご自身を、ご自身が資源として見ることで、そして活用しようとする視点から、私も自分の強みを知っておきたいと思いました。そして精神障がい者特有の対人関係や社会生活機能の改善に、「写真を撮ること」が有効に作用するという考えを初めて学びました。写真を撮ることで普段人の視線が過剰に気になるという精神障がいの方が「見られる」から「見る」に変わるという反転効果があることには、なるほどー！！と心底思いました。精神障がいの方の生活のしづらさをうまく汲み取った活動であることがよく分かりました。写真を撮ることは主体の回復であり、被写体を選択することで主体を自覚し、主体を発揮することを試みる写真ワークショップの活動、そして発想は、今後自分の中に持っていたい考えです。

本日の講話は、普段自分が立つことのできない、親として、そして写真家としての立場からのお話で、自分にとって新しい考え、工夫、発想の連続でした。

ご家族の方から直接お話を聞くという機会は、今まであまりなかったもので、とても新鮮でした。

「どうしてこのような病気になってしまったのか」「どのような対応をすればいいのだろうか」「どこに誰に相談すれば？」と分からないことばかりで、たくさん悩まれたんだろうな、と思いました。また、社会からの偏見のことや将来のこと、対応の仕方など、考えれば考えるほど、きっと不安ごとは次々に増えていったんだろうな、と思いました。

社会がもっと病気のことを理解していくこと、相談機関の情報などがもっと広がっていくことで、当事者の方も、そのご家族の方も、今より住みやすい社会になるのではないかと思います。

当事者ではなく、そのご家族側だからこそ抱えることとなる不安ごとや困っている問題、それを少しでも解決できるような支援方法があるということを知ることができました。写真を撮影することが、どのように有効なのか、理解することができました。人の視線が気になるという当事者の方は、結構多いのではないのかと思いました。ですが、写真を撮ることで、視線のことを忘れ、見て撮影をする。見られることから、見ることに反転するという考えは、すごいな、と思いました。そして、写真を通して人とコミュニケーションもとれるようになるなど、写真の凄さを感じました。

学生が撮った写真を見ながら、小林さんからコメントをしていただく時間がありました。小林さんが様々な話をしてくださり、とても楽しい時間でした。写真撮影に参加している方々も、きっとこんな風楽しく参加しているんだろうな、と思いました。

今まで精神障がい者の方のお話や精神保健福祉士の話は聞いたことはありましたが、ご家族のお話を聞いたのは初めてでした。また、写真家の方がお話しして下さると聞いたとき

は、写真と精神障がいとの関係が全く想像つきませんでした。しかし、今回の話を聞いて、外出するきっかけになること、街の人や他のメンバーさんとのコミュニケーションをとる上での会話の材料になることを知りました。

今回のお話の中でも特に心に残っていることは、「見られることから見ることに反転する」という発想でした。他人の視線を気にして外出しにくさを感じている方には、うってつけの発想だと思いました。

最後に学生が撮った写真を見ながらのお話はとても面白かったです。中心が真ん中にないと不安定など1枚の写真を見るだけでいろいろなことが解ることができました。

また、写真を撮ったときの思いや気持ちを語ることで自己主張にも繋がることに気づくことができました。

今回の講話では、家族としての立場、NPO 法人としての立場、写真家としての立場という3つの観点から話していただき、福祉や医療とは別の視点を得られた様な気がしています。

精神疾患を発症したと分かった時には、何を頼ればいいのか、誰に相談したらいいのか、本人や家族はどれ程心配で不安なことなのかが感じられました。うつ病等がメディアで取りあげられる様になり、少しずつ精神疾患も誰もがその病になり得る可能性のあるものとして知られ始めているのではと思っています。でも実際はまだまだ知られていないことも多く、知らないからこそその偏見が根強いのだろうと感じます。知っていれば、病のために出来ないことや難しいこともあるが、それ以上に普通の面が沢山あることに気付けるのになあと思います。ご家族や本人が相談したい時に出来る場所、精神疾患がどのようなものであるかを知ってもらう機会、そういったものを今後どのように発展させ広げていくかが精神保健福祉としての課題なのかなと思いました。

講話の終盤で代表学生が撮った写真にコメントを頂きましたが、この人はこういう写真を撮る人だったのかと新しい発見だったような気がします。学内にこんな場所があったのかなとか、何気なく通り過ぎている場所にこんなものがあったのか等、3年半通ってきた場所にもまだまだ知らない所があって面白かったです。そして、写真を撮ることによる視点の変化、個人によっても変化する視点、カメラを持つことで自由に自分を表現できるかもしれないなと感じました。

今回の講話を今後活かしていきたいなと思いました。

写真ワークショップでは、当事者の活動の様子や学生の写真を見ていただきながら実際に体験することができ、非常に興味深く感じました。カメラを持つことで地域に出向きやすくなり、地域の方との交流も生まれ、自分や地域について新たな発見をすることができるこの活動はとてもいいな、と思いました。“見られることから見ることに反転する”という考え方が非常に勉強になりました。また、実際に写真を見ていただくことで実際にワークショップを体験し、自分がどうしてこの場面を撮ったのかを自分の口で話すことで自己開示の手助けとなり、また、それを周囲の人が認めてくれるということはとても嬉しく意味のあることだと感じることができました。

今回、写真ワークショップについて詳しく知ることができました。見られることから見ることに反転するということは写真を通してだからからこそできる一つの手段なのだなと、その発想は全く思いつかなかったのも、とても大きな発見でした。

写真が上手い、下手、テクニック等は気にせず、自分が興味を持って撮った写真を色々な人に見てもらい評価してもらうことで、自分の自信を回復することがこの写真ワークショップの目的なのだなと感じました。実際に、学生が撮った写真を見て、どのような思い

で撮ったのか、話を聞いていると、その写真からその人のその時の気持ちが伝わってくるような気がしました。

今日は、写真ワークショップの素晴らしさを学ぶことができました。

小林さんは写真家であるということで、私たちの中から選抜されたメンバーで何枚か写真を撮り、それを小林さんに評価していただきました。小林さんは写真に対する着眼点がすごく、私たちが何げなく撮った写真も深く考察しており、写真とはこうも深いのかと感心しました。私が撮ったトイレの写真が、まさか褒められるとは全く思っていなかったもので、正直嬉しかったです。そして小林さんや当事者の方々が撮った写真が8月にあるということなので、時間があつたら行ってみたいと思います。

小林順一さんの話を聞いて思ったことは、1つの物事に対して見る、感じることにはとても大きな差があるということでした。

例えば、自分が撮影した木の写真ですが、後ろの方にタンポポが咲いていることには、当日言われるまで全く気付きませんでした。他にも、自分が花だと思って撮影したものが、そうではないように思われていたり、様々な観点のズレを見ることができました。

今回、自分は学生側で写真を撮影した者として講話を聞き、撮影した写真を発表しました。そのため、自分が撮った写真は何だったのか、何を撮ろうとしてそうなったのか、何を考えながら撮ったのか、ということが、事前にわかっている状態でした。これがそうでなく、何を撮ろうとしたのか、等を知らずに写真を見て、そのとき何を感じるのだろうか、と考えました。

写真だからこそ、この価値観、焦点のズレが顕著に現れているように感じましたが、これは他のことにも絶対あるものだと思います。大事なことは、他者の価値観や感情をないがしろにせず、自分のそれらを相手に押し付けることなく、相手の考え、価値観、感性を受け入れ尊重することであると感じました。

社会資源が発達していなかった頃、どのようにして回復に導き出したのであろうか。社会資源も色々あるが、小林さんが生み出された写真ワークショップには感動した。「人の視線が気になる人」や「人と話すことが苦手な人」に有効である。写真を撮ることで「見られることから、見ることに反転する」街でカメラを持っていると優しく声をかけられる、と言った小林さんの言葉が印象に残っている。それは小林さんの優しさからくるものであると感じた。地域に出て行き、住民の方と触れ合う中で何気なく撮った写真から小さな発見を見つけたり、自然の雄大さに気づかされたり、一つ一つに生命が宿っていることを教えてくれたりもするものだと感じた。地域の素晴らしさを再発見することは、人との交流の大切さも教えてくれ、生きているという実感を持たせてくれるのではないかと思った。

精神障がいの方が生き生きと暮らしていくためには、直接的に支援に関わるためだけでなく、地域交流や精神障がい者が活躍していける場を広げていくことが大切だと思った。

今回の講話を通して、障がい者家族の気持ちや障がい者支援について考えることが出来ました。

写真活動についてのお話も非常に印象的でした。特に「写真を撮る」という行為が、「見られる」ことから「見る」ことへの意識を反転させることができるというお話は、人の視線が過剰に気になる方にとって、それを気にせず安らかな心で写真を撮る、風景に集中できる貴重な時間になるのだと感じました。さらに、撮影した写真を媒介として人と話すことができ、自己表現をすることも出来ます。人との会話のきっかけが生まれ、自分の感性

を発見し、それを伝えるという作業は、精神障がい者特有の対人関係や社会生活機能の改善に非常に有効なのだと学びました。写真ワークショップは、興味や意欲、心から楽しんで取り組める何かがあること、そんな何気ないようで重要な要素を持った活動だと感じました。私も、日常にひそむ素晴らしい物事に気付ける視点を忘れずにいたいと思います。

今回は小林さんが写真家ということもあって写真を通して当事者の方に働きかけていた。写真から様々なことが引き出されていると思った。1枚の写真からコミュニケーションが生まれたり、当事者の方から意欲が生まれたりしていて、こういう1つのきっかけの大事さを改めて感じた。「発想」を生み出していくことも必要だと思った。

写真を撮る話を聞いた時、障がい者の立場を理解しているのだなと思いました。「見られるから見るへ」という言葉を聞き、障がい者の立場、環境等を整理し理解をし、それを改善に向けて行動しているので凄い行動力だなと思いました。実際に障がい者を支援していく時も、患者様のそれぞれのニーズを理解し整理をして、後に続けていく事が重要だと思うので、今回それを学べたことは自分にとって大きな収穫だと思います。

今回学んだ、親の責任、ニーズや立場の理解と整理と改善に向けての行動、これらの事を実習でも活かしていけるよう努力して支援者としての資質を高めていきたいと思います。

最初、写真と精神障がい当事者とのつながりがわからなかった。しかし、小林さんのお話を聞いて考えが変わった。精神障がい当事者の中には、「人の視線が気になる」「人と話すのが苦手」という方がいる。写真を通して「見られることから見ることに反転する」という発想は私には出来なかったもので、とても印象に残った。また、写真を通して人と交流するという方法も印象に残った。